

二 地域研究研究科の歩み

こうして懸案の地域研究研究科が実現した。新制大学がスタートしたときに大学名が英語で Tokyo University of Foreign Studies として先に決まったという経緯からすれば、また外国語学部に附置された学内研究施設としては海外事情研究所が語学研究所よりも早く設置されたことを顧みれば、地域研究研究科は外国語学研究科に先んじて、もしくはそれと同時に設置されてしかるべきであったのかもしれない。

ともかく、地域研究研究科の発足は、本学の歴史に画期的な一步を刻んだものといえよう。わが国で最初に地域研究 (Area Studies) を唱道した河部利夫教授 (アジア・アフリカ言語文化研究所) は、本研究科設立と時を同じくして退官したが、その際にこう語っていた。「本学は新制大学として発足以来、常に言語研究と平行して、地域研究にも関心を持ち努力してきたことは大方の知るところであります。そこへ、新学年度より地域研究科の大学院課程が開設されることになりました。このことは、外国学の発展のために実に刮目すべきことだと思います」(「『外国学』の発展を祈りながら去る」『東外大ニュース』二九、一九七七年三月十六日)。

最初の一九七七(昭和五十二)年度の入学志願者数は、募集期間が短かったにもかかわらず二六名に達し、合格者は一〇名(男・四名、女・六名)であった。以後、一九九二(平成四)年に本学の博士課程設立に伴い、地域研究研究科修士課程が地域文化研究科博士課程へと発展的に解消するまでの一五年間存続した同研究科は(在籍者が全て修了もしくは退学したのは一九九五年度であった)、合計一六七名(男・九六名、女・七一名)の国際学修士を生み、大学・研究機関はもとより、報道界、出版界、産業界、国際機関などで幅広く活躍している。院生の研究論文発表誌

としては「地域研究」があり、歴代の研究科長は次の各教授であった。長幸男（一九七七一八一年度）、宮川透（八一八八年度）、田中忠治（八九一九〇年度）、中嶋嶺雄（九一一九二年度、但し同教授在外のための残任期間は清水透）。なお研究科の残存期間としての九三一九五年度は、上村忠男教授が研究科長であった。

このような本学の地域研究研究科は、一五年間にわたってわが国の地域研究の中心的な研究・教育機関としての役割を担ったのである。そうしたなかで特に注目されたのは、既成の社会諸科学への挑戦としての地域研究の意義を強調する形で一九八七年十一月九日―十二日に開催された本学主催の国際シンポジウム「地域研究と社会諸科学」（実行委員長・中嶋嶺雄、同副委員長・山之内靖、小浪充）であった。同シンポジウムにはエドワード・ホール、ジョン・レッジ、J・A・ストックイン、チャルマーズ・ジョンソン、クロード・カダール、K・V・ケサヴァン、金日坤、中根千枝、山崎正和、飯田経夫、石井米雄、板垣雄三、米山俊直、中村光男、猪口孝、片倉もところ、渡辺利夫らの内外の碩学や権威が、宮川透、山之内靖、田中忠治、中村平治、小浪充、田中治男、川田順造、二宮宏之、新田実、清水透、上村忠男、中嶋嶺雄ら、本学地域研究研究科の教官や学生諸君と白熱した討論を展開し、長幸男学長も参加して本学地域研究の存在をアピールした（同シンポジウムの全記録としては、中嶋嶺雄／チャルマーズ・ジョンソン編著「地域研究の現在」大修館書店、一九八九年参照）。このような成果がやがて地域研究の博士課程実現へとつながっていったのである。